防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第113号(2016. 8. 1)
事務局川西地区自主防災会

丸亀市の取組について梶市長にお聞きしました

今月は、丸亀市の梶市長に「まちづくり」や「防災」への取組についてお伺いしました。

【丸亀市の概要】

平成17年3月22日、旧丸亀市、旧綾歌町、旧飯山町が合併し、新「丸亀市」として発足。瀬戸内海に向かって開けた香川県の海岸線ほぼ中央部に位置し、人口110,133人、世帯数44,207世帯(H28.5.1現)。丸亀城、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、中津万象園・丸亀美術館、丸亀平井美術館、うちわの港ミュージアムなど文化拠点の他、ニューレオマワールド、丸亀ボートレース場、太助灯籠、金比羅街道、飯野山、青ノ山、塩飽諸島等、多彩な観光スポットを有しています。特産品・名物は、うちわ、一貫張、青木石、桃、ハッサク、菊、香川本鷹、うどん、骨付鳥、どぜう汁等。

丸亀市庁舎

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

【梶　正治市長のプロフィール】

昭和28年1月生まれ、神戸大学卒業、香川県職員、香川県議会議員4期等を経て
平成25年4月丸亀市3代目の市長に就任(現在)。

Q.　どういったきっかけで政治の道に入られたのですか？

A.　高校3年の時に大黒柱の父が結核で倒れ、大学へ行くのに奨学金を受けたことが最初のきっかけです。社会にお世話になっていると言う気持ちを抱くようになりました。香川県庁に入ったのも、公務員として社会の役に立つ仕事がしたいという思いからでした。
仕事を続けるうち、「決められた事を決められた様にする」ことを求められるという不文律に疑問を持ち始めたのですが、その頃、当時、衆議院議員であった加藤繁秋氏の秘書にというお話があったのです。もっとも正直なところこの時はあまり深い考えも無く、自分が

政治の中心になっていこうとは思っていませんでした。その後、秘書の仕事は加藤氏の落選で失職、しばらくは行政書士の仕事をしていました。

終始笑顔で対応頂けた梶市長

そうこうするうちに県議会議員に出たらとの話があり、そこで初めて人生の今後のことを考え、思い切って立候補してみたのです。とはいうものの世間は甘くなく、2 回連続落選しました。しかし、妻が物心ともに支えてくれた上、もともと楽天的な性格でもあったので何とか苦境を乗り切り、3 回目の選挙でようやく当選を果たしました。

議員の仕事に没頭している時に起こったのが東日本大震災です。震災 3 か月後にボランティアで石巻の被災地に入ったのですが、この時に、自治体の力と言うものについていろいろ考えさせられたのです。同じ津波に襲われても死亡した方の少ない自治体もあれば、そうではない地域もあります。多くの児童が亡くなった大川小学校の校舎内にランドセルやピアニカなど学用品が散乱する様は本当に悲しい光景でした。

中村副会長、太田理事

津波が来るのはどうしようもありません。しかし、市町の行政体がどのような防災また、被災後にどういう対応が出来るかによって被災の度合いも、被災後の人々の生活の質も左右されます。特に行政の首長の判断というものは非常に重要ではないかというのが私の抱いた思いでした。そこで振り返って丸亀市はと考えた時に、それまでの市政に対して抱いてきた疑問は自分こそが解消すべきと思ったのです。

Q. 丸亀市のまちづくりについてお話をお聞かせ下さい。

A. まちづくりにはいろいろな側面がありますが、やはり一番の基本は安全でしょう。建物や堤防などハード面が重要なのはもちろんですが、もっと重要なのは人間の動く体制だと思います。何か事が起こった際、それに対し、色々な事柄をうまく処理できる体制作り、人間がうまく動ける体制づくりが肝要ではないかと。

市庁舎から見える丸亀城

ただこれは、行政側だけの問題ではないというのがポイントです。例えば熊本もそうですが避難所を指定していても、その時の状況によって実際そこに確実に避難できるとは限りませんし、人数オーバーになってしまう避難所ができてしまう可能性もあります。また、各避難所にリーダーとなり得る人がいるかどうかも、状況を大きく左右します。行政の職員が行かないと避難所の運営が何もできないというのでは、食事や医療、トイレなど対応に大幅に遅れが生じるのは熊本の例をみても明らかです。さりとて、職員総動員で避難所に出払ってしまっては、軸となるべき役所に人が不在というのも、これまた困った事態といえるでしょう。こうしたことを解消するには、市民の皆さんの協力が不可欠なのです。ですから、ハード面と同時に、人と人とのつながりというソフト面を大切にしたまちづくりをしていきたいというのが私の考えです。

実はこれは災害に限らず、普段の生活にも共通した事柄です。たとえばコミュニティへの支援をとってみても高松市などと比べると行政の対応が不十分な面はあります。それは否定できません。しかし、公務員が、行政がすべてに対応するというのは決して理想的とはいえないのではないでしょうか。むしろ公的なもの以外で相談できる、頼れるという環境があることが望まれます。ですから、そうした体制づくり、すなわち人と人との確かなつながりを支援する方策をいろいろ考えていきたいですね。言ってみれば、ソフトの充実したまちづくり、地域づくりというか、それが私の目指すべきところではないかと感じています。

Q. 自治会の組織率が全国的に低下しておりますが丸亀市の取組についてお聞かせ下さい。

A. これは非常に深刻な問題です。現代社会は良くも悪くも「個の生活」が定着しています。また、何かと負担を嫌うという風潮もあります。もちろん市としては自治会育成の予算を取ったり集会場建築の補助金を出したりなど対策をしているわけですが、それが地域にとって必ずしも良い結果を招くとは限らない面があります。自治会に入って会費を払って…ということをしなくても、すべて行政任せすれば良しと言う考え方もできてきたりするわけです。これでは当然、人のつながりのある地域づくりはできません。ですから、その辺のバランスをとりつつ、各地域、個別の例ごとに毎々、話し合いや試行錯誤を繰り返し、最善策を求めるということを重ねています。具体的には、団地を建設する際、あらかじめコミュニティの集会場づくりについても取り決めておくことを条件にするなどですね。ハ

ードを確かなものにすることでソフト面、すなわち心のつながりを育てていこうというのがその意図なのです。

Q. 以前より懸念されている南海トラフ地震に対する丸亀市の取組をお聞かせ下さい。

A. これは川西の自主防災の方から指導をして頂きながらと言う事になるのですが…。一番の心配は古い木造で、その耐震診断、耐震改修です。また、家具の転倒防止については助成金アップのための見直しを進めています。とりわけ、事業所に対しての耐震補強工事への推奨・補助制度は県下の他市町に比べ、決して見劣りするものではないと自負していますし、その姿勢を内外から高く評価されていると聞いています。

また、避難訓練については自主ぼう（かがわ自主ぼう連絡協議会）からの提言もあり、海岸地域の皆さんの参加で行い、けっこう実践的な訓練が行え、心強さを感じています。

なお、災害において一番重要なことは人命を守ることです。この人間の被害を最小限にできる体制づくりをしておけば、丸亀市にはそれぞれにコミュニティ、自主防がありますから被災後の対応においてはそれらが充分に機能するのではないかと、楽観的かもしれませんが、信じています。もちろん、行政が最大限のバックアップをすることは大前提ですし、そのためにボランティアの受け入れや活動をスムーズにするための取り決めや研究視察なども行っています。

ただ、南海トラフの場合、徳島県や高知県の被害が大きくなることが想定されています。その分、丸亀市は被害を最小限に抑えることはもちろん、他県への救助や援助を行うことも期待されています。ですから、そのための体制づくりやさまざまな機器類の整備も行っていかなければならないと。

もう一つ重要なことは、被災時における他行政体との連絡・協力体制づくりだと思っています。これまでの大きな災害でも語られてきましたが、救助要請や物資の援助要請を市から県、さらに国へと伝え、その返事が同じルートで戻ってくる、それに何日もかかるというのでは被災地は大変です。ですから、丸亀市では、他のいろいろな市町と災害協定を結

んでいます。被災時に直接助け合いができるようにということです。
また、民間の国際医療ボランティア AMDA と岡山県総社市の両者から四国内の協力拠点として丸亀市に加わってほしいとのお話を受け、現在三者協定を結んでいます。しかもすでに発動していて、今回の熊本地震で被害の一番大きかった益城町に野口健さん(アルピニスト)の指導も得てテント村を設営運営したりしています。これは、南海トラフの際にも役立つことが証明されたようなものではないかと思っています。

Q. 川西地区自主防災会についてどのように思っておられますか。

A. それはもう、尊敬しかありません。全国表彰を何回も受けられ、総理大臣表彰まで頂いているのは当然のことだと。実際、実践的な提言もいただけるので私としてはありがたい限りです。訓練の方法一つをとっても、夜間に行ったり、スーパマーケットの中で行ったりなど非常に実際的です。備蓄にしても数はもちろん、その点検などまさに防災組織の模範です。市へも厳しいお言葉もいろいろいただいているわけですが、ありがたく、とても参考になります。今回の熊本県の被災地へ自ら行って頂けていることも、丸亀市民としても誇りに思っています。大変とは思いますが、これからもトップリーダーとしてご活躍をいただくことを願っています。

Q. 同じ様な質問になります、かがわ自主ぼう連絡協議会に何か望まれる事がありますか。

A. 川西がいくら凄いと言え、後に誰も続かないというのでは、いつかは息切れしてしまうかもしれません。しかし、残念ながら丸亀市に限らず市民一人ひとりの防災意識はまだまだだという感じがします。ですから、香川県民全体がそう言う意識を持ってもらえるように　自主ぼうの方で広めて頂ければありがたいですね。その事が丸亀にもまた返って来ると思いますから。

梶市長さん、お忙しい中を貴重なお話しを聞かせて頂き、誠にありがとうございました。自主ぼうと致しましても市長さんの想いに叶うように「地域の防災力向上」に邁進してまいります。どうぞ今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

事務局だより

平成28年　8月

かがわ自主ぼう連絡協議会事務局より、最近の活動紹介とお知らせです。

1. 中讃聴覚障害者協会　会員の皆様と防災研修 7月24日（日）

手話の大切さが身にしみた研修となりました。参加者、スタッフ含め 40 名、丸亀市ひまわりセンター４F 会議室において、次のカリキュラムを実施しました。

（１）熊本地震の教訓
　　＜映像を使用して約 40 分説明＞

（２）実践学習
　　①AED 使用した心肺そ生研修
　　②買い物袋、ワイシャツ等使用による応急手当研修
　　③毛布等による担架搬送研修

（３）非常食（エビピラフ、カレー、山菜おこわ）を用いての体験食事

手話を通じての研修でしたが、時間の経過とともにハート to ハート、なごやかでかつ真剣味あふれる研修となりました。

2. 盟友　横川日佐夫氏（坂出内浜西自主ぼうさい会長）逝く

去る 6 月 28 日（火）早朝、闘病生活（約 3 年半）で頑張っていた横川さんが亡くなられた。生前、川西コミュニティセンターによく立ち寄っていただき、情報交換を行なったし、4 年前の香川県リーダー研修では実践訓練のアドバイザーを引き受けて、大きな声とテキパキとした指導ぶりに、素晴らしい仲間が加わっていただいたものと喜んでおりましただけに残念でなりません。

奥様が述べられたご主人（横川日佐夫さん）の想い出をご紹介します。

「誰かに喜んでもらえることを夫は生き甲斐にしていたのでしょう。いつも周りに気を配り、できることがあれば何でもしていました。自主防災会の仕事にも一生懸命で、皆が穏やかに過ごせることを願っていました。そんな優しい夫に私は助けられてばかりだった気がします。夫と一緒だったから感じられた幸せや喜びがたくさんありました。何度伝えても伝えきれないほどですが、万感を込めて「ありがとう」の言葉を贈ります。ずっと頑張ってきた分、これからゆっくり休んでほしいと願うばかりです。」

横川様のご冥福をお祈りいたします。　合掌　　岩崎正朔

編　集　後　記

今月の防災減災の輪は、丸亀市長梶様をインタビューさせていただきました。ありがとうございました。